

榎尾川の治水：地域の誇り「先人の叡智」を未来に伝えよう

今本博健

1 先人の叡智が生きる榎尾川の治水

榎尾川上流部の地藏橋周辺の河道を異様に曲がりくねらせたのは古い歴史をもつこの地域の先人の叡智である。河道を右岸崖下から遠ざけたのは洪水流の洗掘により崖が崩壊するのを恐れたからであり、曲がりくねらせたのは流れを緩やかにして取水しやすいようにするためである。また、洪水の氾濫区域を田や畑の農地とし、家屋は高所に建てた。洪水から遠ざかる「避水」の知恵である。これにより江戸時代を通じた200年以上も家屋が浸水することはなかったという。

昭和になって農地の一部を宅地化してからも、護岸の高さに差をつけ、農地側に溢れるようにした。「封水」に拘泥せずに家屋を守る「遊水」の知恵であり、効果は下流にも及ぶ。

実に見事な治水技術である。その先人の叡智がいまに活きている。地域の誇りたりうる。

昭和57(1982)年の水害で30戸が床下浸水したのをきっかけとしてダム案が浮上し、一時はそれに傾いた。だが、ダムはある大きさの洪水までにはしか役立たない限定的な治水技術である。恵まれた豊かな自然環境まで破壊する。

いままさにダム時代は終焉しようとしている。そのような時にダムを選択すれば、先人はその愚かさを嘆き、子孫はその浅はかさを恨むであろう。失われた自然は二度と戻らない。安全で豊かな榎尾川を子孫に引き継ぐことこそが、いまに生きる我々の義務ではないか。

その意味でダム本体工事に着工しながら河床掘削案を提示した橋下知事の勇断は絶賛に値する。

2 河床掘削案はダムを代替できるか

榎尾川上流部の住民は長年にわたりダム計画に翻弄されてきただけに、この地域では50ミリ対策ではなく、80ミリ対策を先行して実施することが望まれる。

では、河床掘削で80ミリ対応は可能だろうか。

平成7(1995)年の洪水では時間最大雨量46mm/hという豪雨にもかかわらず外水氾濫なしに流下した。このことから現河道は50mm/h洪水にほぼ対応すると考えてよい。

1/100の80mm/hの場合、水位計算結果によると50mm/hの場合より約0.8mの水位上昇が見込まれるので、余裕高を0.6mとして最大1.4m掘削すれば、1/100を想定したダムと同じ効果が得られることになる。河床掘削は超過洪水にも一定機能するため、ダムより優れているといえる。

3 実施上の問題点

原案では、J6落差工を1.4m切下げのように改修し、J8およびJ12落差工を撤去するようにしているが、現河道の縦断形状がそのまま保たれるようJ8およびJ12落差工についても1.4m切下げ、そうず橋上流で現河道に摺りつけるのがよい。

河床掘削の効果が薄められる合流点からJ6落差工までは掘削に加えて0.2m程度の護岸の嵩上げが望ましい。

また、掘削部では現護岸に根継するようにしているが、耐震性を考慮すると場所によっては全面改修したほうがよいと思われる。

環境への配慮として、魚の遡上のため落差工は1段0.3mほどの多段型にするのが望ましい。大畑橋周辺にはホテルが飛び交うようになっているが、工事完了後数年で自然回復するであろう。

以上